



## 就労定着支援の新たな取り組み

ソプラス 統括所長 井端郁人

平成18年より障害者自立支援法

が施行され就労支援の抜本的強化が図られました。その大きな柱として

就労移行支援事業が創設され、一般就労への移行が利用者ニーズと合致

し私たちの支援のあり方も変化してきました。この間就労移行支援事業

所やその利用者数は年々増加してきました。一般就労へ移行した人も平成

25年度では約25%に上ります。また、就労移行支援事業所による一般就労移行率で0%の事業所

が、平成20年4月と平成26年4月では何れも約35%台と大きな変

化はありません。一方で20%以上

の移行率の事業所の割合が、21・

5%から45%に伸び、就労移行支援事業所の2極化が進んできたと言われています。

これまでの実績により就労移行

支援事業所の課題が、「一般就労への支援」から「継続就労のための定

着支援」に移りつつあります。これまで6ヶ月であった定着支援期間

が3年に延び、各々の事業所が責任を持って他機関と連携を図りつつ

働く人を支えるということ。ソプラスでも就労移行支援事業所の

就労支援員が就業・生活支援センターや法人内ジョブコーチ、職業セン

ターのジョブコーチと連携し、定着

支援にあたってきました。しかし、ト

レーニングの提供不足や雇用事業所の

環境整備不足等で求職や離職をされる

方が出てきました。生活面での乱れや

職場での対人関係の悪化により、働く

ことで自己肯定感を低下させる方も少

なくありません。また、ソプラスの集

団から雇用事業所の集団に移ること

で、集団からの孤立を感じる方もいま

す。今年度より新たな課題に対する支

援として、就労相談や職場での課題解

決トレーニング、生活面のスキル獲得、

余暇、居場所等の機能を創り、集団へ

の所属感を基盤にした自己肯定感の確

立が今後の職業生活を支える糧になる

ことを踏まえ、働き続けたい人を支え

る仕組みとして自立訓練（生活訓練）

事業で定着支援を行っています。

# 強度行動障害の研修を受けて

てんとう虫 生活支援員 西垣千穂

今年度、強度行動障害の研修を受けさせてもらえることになり、現在連続研修の最中です。

まず、褒めることの大切さ、職員が協力して支援していくことの大切さ、本人のことをしっかりとアセスメントしていくことの大切さを学ぶことができていると思います。

これまで行動障害のある方に対しては、直接的他害・間接的他害・自傷行為等を起こさないように見守り支援をしてきました。私たちはなぜ、このような行動を起こしてしまうのかを考えながらも、その行動を起こさない方法を

考えてきていたと思います。それは本人のニーズを無視した支援であり、アセスメントのふりをしていただけだと思います。この研修では支

援方法を学ぶのではなく、対応方法の考え出し方を学び、実践を事業所内で共有し普及させていくことを目的としています。

まず支援をする上での目標設定と目標行動を決め、次に減らしたい行動(問題行動)、増やしたい行動(適切行動)を決めました。その過程でなぜこのような行動を起こしてしまうのか?本当にこのような行動をしたいのか?本当はこう

したいのではないか?等、様々な視点で考えることができました。

その中で、私たちが考える減らしたい行動は本当に減らすべき行動なのか?基準になるのは本人にとって危険か、他者にとって危険・迷惑か、本人の学習を妨げてしまわないかに加え、個人の価値観や対象者の生活年齢も影響してきます。行動そのものが不適切でなくても頻度や強度によっても問題となることがあります。

次にその行動に対してどう支援していくのかを考えました。どうなると問題行動が起こるのか?問題行動を起こすとどうなるのか?適切な行動をするときはどんなときか?それに対してどうすれば本

人のニーズにあった支援ができるのかを考えました。今まで細かなところまで考えたことがなく、理想

の支援ができるのか不安を抱きながら考えていきました。行動を起こす理由は何となく検討をつけながらも、行動を防ぐことを優先的に考えていました。減らしたい行動の代わりに増やしたい行動をしてもらう、増やしたい行動をもらうためにはどのような支援をしていくのか。増やしたい行動が増えれば減らしたい行動は自然と減っていきます。そこで増やしたい行動ができたときはしっかりと褒めていくことがとても重要であると学びました。減らしたい行動ばかりを注目し、その行動に対し

ての対応ばかりをしていきま  
た。本人は皆が注目してくれば  
喜びを感じ、それに対して私たち  
が反応する。それを増やしたい行  
動として捉え、注目してもらえ  
行動が増やしたい行動に変わって  
いくのだと思うようになりまし  
た。

また、その行動を記録していく  
ことが大切になってきます。これま  
で私たちは、問題行動が起きると  
起きた行動しか目に入っていなかつ  
たため、なぜこのようなことが起こ  
ったのか？と職員同士で話し合い  
をしても「さあ？」「わかりませ  
ん。」「気が付いたら行動が起こっ  
ていました」「○○だったからじゃな  
いですか？」等の言葉しか出なく、

なんとなくでしか本人の行動や周  
囲の行動がわからないでいました。

しっかり行動の前の行動を見よう  
と発信しても誰かがしてくれるだ  
ろうと思っていることが多かったよ  
うに思います。記録をとり一人ひ  
とりが記録用紙にすぐ記入しな  
ければいけないと意識を持つこと  
ができるようになると、「○○してい  
るときに○○があった」「○○さん  
がこのような行動をした」「職員が  
○○と声をかけ、その後こんな  
行動をした」等、様々な本人の行  
動が見えてくるようになりまし  
た。曖昧だったアセスメントの視点  
が明確になり、それを記録するこ  
とで共有できるようになってきま  
した。職員の意識も変わりつつあ

りチームとして成長してきたので  
はないかと感じています。

一人の職員だけががんばっていて  
も見えてこないことの方が多くあ  
り、みんながチームとして同じこと  
を目指し、同じ視点を持つことで  
自分たちのチームワークが向上し  
ていくのだと実感しました。同じ  
ことに目を向けて、みんなでアセス  
メントしそれを記録することで、  
自分が見えていなかったことも見  
えてくるようになってきました。

いなかったのかもしれないことに気  
づくこともでき、褒め方や自分た  
ちの「支援」を考え直す機会にも  
なりました。もしかすると褒める  
ことに恥ずかしさがあったのかもし  
れませんが、正しい褒め方やタイ  
ミングがわかっていなかったのかもし  
れません。褒められるとその行動  
をしようと思うことは当然であ  
り、褒められたと実感しないと褒  
められていないのと同じだと思いま  
す。

この研修を通じて、協力してい  
くこと、褒めていくこと、本人のこ  
とをしっかりと見て記録していくこと  
の大切さを学び、皆が認め合うこ  
とで笑顔が増える事業所を目指  
していきたいと思います。

# よつ葉福祉社会からのお知らせ

## NPO法人 よつ葉福祉社会 10周年記念式典

日時：平成 27年 12月 6日（日）

時間：13：00～16：00

場所：かつらぎ総合文化会館 AVホール

（和歌山県伊都郡かつらぎ町丁ノ町2454番地）

### 記念講演会

13:30 ~ 14:30

テーマ「人に寄り添って」

講師 小林 茂夫 氏

### 人権芸術鑑賞会

14:45 ~ 15:55

「津軽三味線の激奏」

演奏者 稲岡満男 & 音楽工房

### プロフィール

- 1973年 北海道教育大学函館分校卒業
- 1973年 社会福祉法人 札幌緑花会  
花園学院（知的障害児童施設） 指導員勤務
- 1978年 社会福祉法人 侑愛会  
おしまコロニー おしま学園 指導員勤務
- 1992年 新生園 園長、通勤寮はまなす寮 副寮長（兼務）  
おしまコロニー地域生活支援センター 次長（兼務）
- 1994年 はまなす寮 寮長
- 1995年 おしまコロニー地域生活支援センター 所長（兼務）
- 1997年 明生園 園長
- 1998年 社会福祉法人 大阪市障害者福祉・スポーツ協会  
大阪市障害者就業・生活支援センター 所長
- 2004年 社会福祉法人 大阪市障害者福祉・スポーツ協会 退職
- 2005年 社会福祉法人 宝塚さざんか福祉会 参事
- 2006年 NPO法人 みちしるべ神戸 専門アドバイザー  
社会福祉法人 ともいき会 専門アドバイザー
- 2008年 社会福祉法人 宝塚さざんか福祉会 退職
- 2014年 NPO法人大阪精神障害者就労支援  
ネットワークアドバイザー（JSN）



### 問い合わせ先

〒649-7174 和歌山県伊都郡かつらぎ町佐野677-1  
NPO法人 よつ葉福祉社会  
電話：0736-22-3271

問い合わせ時間 10:00～17:00（土日除く）

参加申込みは、裏面の申込書をご記入の上、FAX又は郵送にてお申込み頂くか、電話にてお申込み下さい。